

# 市史だより

F u k u o k a

28

史的再発見マガジン  
[シシダヨリ・フクオカ]

Spring 2025

TAKE FREE

特集

## 丘陵に守られた 実りたくらし —金の隈・立花寺—

contents

- 10 「新修 福岡市史」ナナム読み
- 11 市史編さん室トピックス
- 12 市史だよりコラム「福岡県地理全誌」ってどんなもの？」

特集

# 丘陵に守られた 実りとくらし —金の隈・立花寺—

福岡平野の東南部、四王  
寺山から博多湾に向かっ  
てのびる月隈丘陵。  
丘陵のたどった歴史と  
人々の営み。

文＝市史編さん室



## ◎「金隈」の名を広めた遺跡

月隈丘陵の中ほど、博多区金の隈にある「金隈遺跡甕棺展示館」は、国史跡金隈遺跡を発掘当時の姿のままに見学できる施設です。金隈遺跡は、昭和四十三（一九六八）年の春、道路施設工事の際に甕棺や人骨が見つかったことをきっかけに発掘調査が行われました。調査では台地上に密集する、三三八基もの甕棺墓、土壇墓一一九基、石棺墓二基、人骨計一三六体が確認され、ここは弥生時代のはじめ頃から中頃にかけての共同墓地であったと考えられています（『福岡市埋蔵文化財調査報告書』七・一七・一二三集）。空港や都市部にも近いこの場所で、このように大規模な甕棺墓群が

それまで見つかっていなかったのが不思議です。

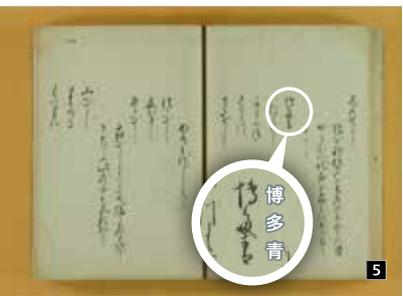
昭和四十七年には弥生時代の墓制の変遷がわかる貴重な遺跡として国史跡に指定され、展示館が整備されました。発掘調査報告書には、遺跡は「桃畑の開墾をしている時」の発見（同一二三集）とも記されていますが、現在、金の隈周辺は住宅や工場が建ち並び、ほかには水田などがあるのみで、「桃畑」らしきものは見当たりません。遺跡が発見された当時は、どのような場所だったのででしょうか。

## ◎発掘調査報告書に残るかつての風景

発掘調査時の写真をみると、たくさんの果樹の間をぬうように発掘調査が行われていた様子がわ

かります（写真①）。よく見ると果樹の実には袋がかけられており、葉の形をみるとモモのようです。また、台地の東南にあたる場所からは、かつて甕棺墓と人骨が見つかったといい、「現在ブドウ畑になっている」と記載があります（同七集、写真②）。昭和五十年頃の地図には金隈遺跡の位置に果樹園の地図記号が示されていることから、やはりこの一帯が果樹園だったことがわかります。

さらに周辺遺跡の報告書をみると、金隈遺跡の東南に位置する影ヶ浦古墳群の調査はブドウ園の造成工事をきっかけに行われていたり（同二四一集）、北側の立花寺遺跡の調査では、調査区の周囲に果樹園地があるといった記載があったり（同三二一集）、記録写真にブドウ畑のような果樹棚



1 金隈遺跡の発掘調査の様子(1969・1970年)。調査区内にはモモらしき果樹が多く植えられている様子がわかる 2 金隈遺跡妻棺展示館を整備した際の調査風景(1980年頃、南東から)。中央にみえる高まりが金隈遺跡で木が茂る部分が第1・2次調査区にあたる。手前はかつてブドウ畑があったとされる場所(推定) 3 現在の立花寺公園付近で行われた立花寺遺跡第4次調査(1993年)。調査用に掘られた溝の両側に果樹棚が広がっている 4 立花寺で最初に果樹栽培を始めた秋根八百吉。席田村園芸会副会長や席田村信用組合理事長を務めた 5 「筑前国産物帳」(元文元(1736)年)にみえる「博多青」。祖木は福岡城外不出とされていたが、明治33年に蓑島の小森某が博多大兵の古木より穂木を得て苗木を育成し栽培。そのナシ園を住吉の実業家であった大神熊次郎が引き継ぎその名が知られ、広く栽培されるようになったといわれている

が写り込んでいたり(写真3)と、果物の栽培に関わる情報がたびたび目に入ってきます。どうやらかつての金の隈・立花寺の様子を知る手がかりは、果樹栽培にありそうです。

### ● 席田村の果樹栽培

明治三十八(一九〇五)年頃、席田村の「大字下臼井今泉荒次郎氏が葡萄栽培を、大字上臼井蓑原虎吉氏がネーブルオレンジ及梨、桃を、大字立花寺秋根八百吉氏が柑橘及葡萄を率先植栽」したことをきっかけに、席田村一帯で果樹栽培が始まります。栽培は急速に普及・拡大したようで、明治四十三年には席田村園芸会が組織され、会員は約一五〇名を数えるほどになりました。大正時代のはじめには「筑紫郡席田村は福岡市を去る東方里許の地にして、近頃葡萄、梨、桃等の栽培を以て其名顕はる」と評されていることから、席田村では、その後も果樹栽培が行われていたことがうかがえます(「福岡県の園芸」)。

なかでも大規模果樹園として全国に知られていたのが、月隈丘陵の中央部に位置する立花寺の秋根果樹園です。大正十一(一九二二)年に発行された『実地踏査果樹栽培法』には、大正六年時点の福岡県下の著名な五果樹園の一つとして、その名が挙げられています。果樹園は四か所にわかれ合計一町八反歩(約一・八ha)の広大な園地で、ナ

シ・ブドウ・リンゴ・モモを栽培していました(写真4)。

ナシは明治四十年頃には栽培が始まっていた(『実地踏査果樹栽培法』)。生産されたナシの一つ「博多青」は、その由来に福岡城とのゆかりが伝わる品種です。もとは福岡城内に祖木があり、五代藩主黒田宣政・六代藩主黒田継高のころ、將軍に献上していたナシといわれています(『福岡県果樹発達史』ほか)。口伝のみで詳しくはわかりませんが、江戸時代中期の地誌『石城志』に「青梨 博多青と云、味殊に美なり」と記されているほか、『筑前国産物帳』にもその名が見え、「博多青」とよばれたナシが江戸時代から福岡で作られていたことは確かだったようです。秋根果樹園では、ほかに長十郎、二十世紀などのナシも栽培しており、大正十一年時点では果樹園の半分の九反歩(〇・九ha)がナシ園でした(写真5)。

席田村内ではモモも多く生産されていました。大正十一年には県内の主な産地として京都郡の新田原地域(現 行橋市・築城郡築城町)、遠賀郡島郷村(現 北九州市)、宗像郡上西郷村(現 福津市)などと並び「筑紫郡席田村方面に其の多きを見るべし」(『実地踏査果樹栽培』)と紹介されています。昭和のはじめ頃には、月隈丘陵一帯の生産量が増加しています(「福岡近郊月隈丘陵の経済地理(二)」)。

また、同じ頃、県内のブドウの産地として、莆田村は糸島郡桜井村（現糸島市）と双壁をなし、市場を争っていました（『九州沖繩の園芸』）。糸島郡で生産量の増加とともにブドウ酒への加工が計画される一方（『福岡県果樹発達史』）、立花寺の秋根果樹園では、キャンベルスアーリーや甲州などに加え、「マスカット、アレキサンドリヤ種」の温室栽培が行われていました（『福岡近郊月隈丘陵の経済地理（三二）』）。

### ● 月隈丘陵に広がる果樹園地

昭和十一年頃の調べでは、果樹栽培を本業とする農家は立花寺・浦田にそれぞれ一軒でしたが、上月隈・下月隈を含め月隈丘陵の六三%の農家が果樹栽培を副業としていました（金の隈一七、立花寺一七、浦田五）／『福岡近郊月隈丘陵の経済地理（三二）』。栽培面積は立花寺の三八町歩を中心に、下月隈一二町歩、金隈八・五町歩、上月隈八・二町歩、浦田・宝満尾を合わせると七〇余町歩（約七〇ha）に及び、年産額は約四万円でした。栽培果実はブドウが約三一%、桃が約三〇%、ナシが約一七%、そのほかにイチジク、ミカン、ビワ、リンゴ、ウメ、クリ等がありました（『福岡近郊月隈丘陵の経済地理（二二）』（図6））。

丘陵周辺の低い平地では主に水田で、果樹園は日当たりのよい丘陵の地形や、水はけのよい真砂

土を利用して、丘陵の低部やそこから続く台地上に作られました。北西からの風をよけるため、果樹園は南側の傾斜地に密に作られました。それでも金の隈南部は北西風を強く受けるため、周囲には防風垣が設けられていたそうです（『福岡近郊月隈丘陵の経済地理（二二）』）。

また、果実の袋かけや収穫などで人手が必要な時期には、糟屋郡志免村（現志免町）や筑紫郡大野村（現大野城市）からも働き手を集めていました。立花寺では袋かけ期に一四〇〇人、収穫期に五〇〇人の計一九〇〇人の延べ人数を雇い入れていました。作業は熟練を要するものであったことから、毎年ほとんど同じ人が働きに来ていたそうです。周辺の労働力を借りながら収穫した果実は、七割が一等級品として千代町市場へ出荷され、残りは立花寺市場から糟屋郡の炭坑や近隣の地域へ売られていました（『福岡近郊月隈丘陵の経済地理（三二）』）。

### ● 高度経済成長期にピークを迎えたブドウ栽培

太平洋戦争中の食糧増産計画による作付統制や青果物統制令などの影響もあり、終戦後には園地は荒れ果て、県全体でのブドウの生産量も戦前の半量になるなど、果樹栽培はすっかり衰退してしまします。昭和二十二年十月に果物配給統制令が撤廃されてようやく、復興に向けた動きが活発

になりました（『福岡県果樹発達史』）。昭和二十六年に福岡県が果樹増殖計画を樹立し、農業振興計画が進められていきます。昭和二十八〜三十七年頃にかけては福岡市の果樹園地造成計画がもちあがり、果樹園が増加しました。

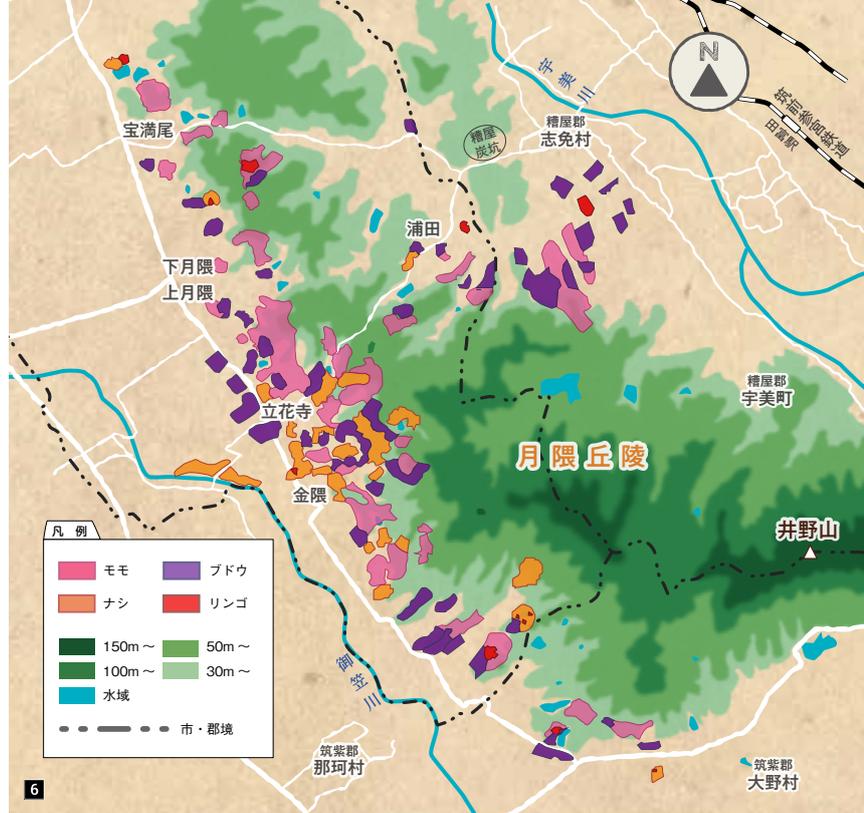
戦後、樹園地造成のための開墾が推進されるなど、とくに力を入れたのがブドウの栽培です。福岡市のブドウ畑の面積は昭和三十九年頃にピークを迎え、のべ一四四haとなり、その後ビニールハウス栽培が普及し、温室ブドウの栽培もほどなく一〇〇〇m<sup>2</sup>に達しました（『最新園芸特産地ガイド③』）。昭和四十六年には、立花寺・金の隈一帯の果樹農家は四〇戸を数え、市のブドウ生産面積約九七haの四分の一をしめる主要産地になります（『農業視察ハンドブック』）。その背景には、古くからの果樹栽培者が戦後に栽培果実をブドウに絞る動きもあつたようです。例えば立花寺のある農園では、戦前にはブドウの他にモモ、イチジクなどを栽培していましたが、戦後に土地改良を行い、ブドウ一色にまともています（『北九州におけるキャンベル、マスカット・ベリー・Aの栽培』）。

### ● 果樹栽培の歴史とともに

ところが昭和の終わり頃になると、金の隈・立花寺一带にも開発の波が押し寄せます。福岡東環状道路バイパスの工事（昭和六十一年）や都市



6 月隈丘陵における果樹栽培の分布 (昭和 11 年頃)。宝満尾から金隈 (金の隈) にかけて、丘陵とその裾部に果樹園地が広がる 7 月隈ブドウ部会で開かれた講習会の様子 (1989 年 5 月) 8 昭和 49 年頃に岡山県を視察し、マスカットオブアレキサンドリアの栽培を始めた光安忠さん (1982 年頃)。この後、マスカットオブアレキサンドリアの栽培が月隈地区に広がった 9 現在も月隈で生産されているマスカットオブアレキサンドリア。月隈地区では 20 年以上にわたり沖縄県の盆用に出荷しており、現在では福岡市内唯一の産地となった 10 標高 236m の井野山 (宇美町) 山頂から望む月隈丘陵。山頂からは 360 度見渡せ、博多湾や立花山、大野城市、宇美町が一望できる



高速二号線の延伸工事 (平成五 (一九九三) 年) などで月隈丘陵が南北に二分され、風景が一変したのです。次第に果樹園地が失われていくなか、丘陵北部の月隈地区で始まったのが、マスカットオブアレキサンドリアの生産です。その後栽培が定着し、現在では福岡市内唯一のマスカットオブアレキサンドリアの産地となりました。月隈丘陵の果樹栽培の歴史を「月隈ブドウ」の名とともに紡いでいきます (写真 7・8・9)。

金の隈・立花寺一带は、明治の終わり頃から平成のはじめにかけて、丘陵の地形や水はけのよい土壌を利用した県内有数の果樹栽培地帯でした。戦前は、果樹栽培は主に農家の副業として行われ、働き手を担った志免村などの近隣地域や流通に欠かせない市場、そして消費地である市街地に挟まれた立地を生かし、流通販路と働き手の確保を行うことで、特色ある果樹園地に成長しました。戦後はブドウ栽培地として急速に成長し、再び隆盛を迎えました。

金隈遺跡が発見された昭和四十三年頃は、まさに戦後の福岡市におけるブドウ栽培の最盛期と、都市開発がさかに行われ始めるまでの過渡期にあたります。明治時代から断続的に果樹園地として利用されていた月隈丘陵の歴史を通じて、現在私たちは発見当時の迫力のまま、金隈遺跡を目の当たりにすることができるのです。

1月2日の朝、金の隈で「<sup>とび</sup>鶯の水」と呼ばれる行事が行われます。中学生の男子数人が蓑・笠を被った「トビ」に扮装し、地域の大人と子供をお供に、家々を訪ねていくというものです。一行が金隈観音堂（P.8～9 マップ参照）を出発し、「わっしょい」の掛け声とともに地域をめぐる、住民が玄関先で待ち構え、トビに勢よく水をかけます。トビが水を浴びると辺りに飛沫が上がり、「あけましておめでとうございます」という子供たちの声が響く中、訪問先からはお年玉が渡され、一行は次の家へと向かいます。

## 02 や神 っ様 てが く金 るの 隈 に

秋田県のナマハゲで知られるように、元日前後や小正月に異形の客が家を訪ねてくる行事は全国で見られ、子供たちが蓑笠や藁束を被って訪ねてくる例も多くあります。こうした客たちは歳神さまの化身であると考えられており、つまり金の隈のトビたちは、近所の中学生でありつつ、家々に福をもたらしてくれる、ありがたい神さまなのです。

「靴下まで濡れとう」とぼやく神さまを先頭に、次の家へと向かう道すがら、「あとでうちにも来て」とお呼びがかかったり、「先日はどうも」「今年もよろしく」と地域の人たちが声をかけあう姿が見られました。主役たちにとってはお年玉をも

らえる機会であり、大人たちは新年の挨拶をかわすきっかけにもなって、和やかで楽しい地域のお祭りです。

こうした行事は福岡では「トビトビ」「トヘトヘ」等と呼ばれ、かつて県下で広く行われていましたが、昭和の後期頃までにほとんどの地域で途絶しました。来訪神行事の要は、訪ねてくる神と迎える人とが対峙する場面そのものにあり、双方に行事への理解がなくては成立しません。地域社会や生活の様式が変わっていく時代に、各地で継続が難しくなったのでしょう。

金の隈の鶯の水は現在では市内で1例しか行われていない貴重な行事です。トビたちが集合住宅やゴルフ場を訪ねていく光景は一見不思議ではありますが、そこに行事を維持できたひとつのヒントが隠されているように思えます。正月2日に金の隈で水しぶきが上がるのは、新旧の家々や法人もふくめて地域の紐帯が生きていることの証しであり、地域の人々がそのために努力してきた足跡を示すものでもあります。



祀」と記されています。以前は「隈下」にあった社が宝満宮境内に移されたというわけです。では移される前の熊野神社はどこにあったのか、「隈下」は、先述の『拾遺』にあった「熊ノ山」とはどこだったのでしょうか？

古地図を見ると、金隈村には「隈ノ下」という字があり、現在の宝満宮を南端に、北に向けて縦に伸びた一帯を指します（北の一部は現 立花寺二丁目）。

では「熊ノ山」はどうかというと、明治3（1870）年の席田郡の山林を調べた記録に、金隈村に熊ノ山という山があり、450坪（約1490㎡）の広さがあったことが記されています（『席田郡村々山ヶ所竝御山札数往還書上帳』）。さらにヒントになりそうな情報として、昭和56（1981）年に福岡市が発行した『福岡市文化財分布地図』に、「熊野古墳」という名が記録されています。この調査時にすでに古墳自体は失われていますが、位置は宝満宮の北150mほど、現在は配電鉄塔が建つ場所にあたり（写真12）、ここは字「隈ノ下」に含まれる地域でもあります。

この付近は昭和50年代に造成工事が行われ、現在

は標高25mの住宅地になり、山らしい面影はすでなくなっています。しかしそれ以前の地図や写真（写真12）を見ると、標高39mの小高い丘であり、もしこの消えた丘がかつての「熊ノ山」であり、熊野古墳が『拾遺』の言う「古塚」であったとしたら、「刀剣の折たる」が出てきたという逸話もうなずけます。「熊野社」の祠を建てるきっかけとなった刀剣は、古墳の副葬品だったのかもしれない。

各地の祭礼の起源として、疫病を鎮めるため、という伝承はしばしば聞くものです。しかし、古い塚から刀剣の一部が出てくるというストーリーには、この土地らしい背景が垣間見えます。著名な遺跡や古墳がここここにある土地柄なだけに、村人の実体験に基づいたお話だったとしてもおかしくありません。

伝承には、土地の記憶をひもとく端緒が宿っています。そして祭礼は、現在まで続く平穏への祈りの実践であると同時に、土地の歴史を後世に伝えていく手段のひとつでもあるのです。

# SPECIAL TOPICS 1

## 金の隈・立花寺の祭り

### 01 奉納相撲とまぼろしの熊ノ山

#### ●金の隈の一大イベント 熊野神社奉納相撲

2024年9月12日、金の隈で開催される奉納相撲を訪ねてみました。

夕暮れどき、自治会の関係者や観戦に来た人々が続々と金隈公民館に集まり、閑静な住宅街がいつにない賑わいに包まれます。立派な設えの土俵しつぽ際に子供たちが並ぶと、行司の仕切りによって取り組みが始まりました。

最初の参加者は小学校低学年生で、子供たちの一生懸命な姿を誰もがほほえましく見守っています。しかし学年が上がるにつれて迫力も増すため、だんだんと観る側にも緊張感が漂い、中学生の部を経て大人が参加するころにはそれがピークとなります。大人の参加者は、小中学校の教員や、付近に宿舎がある関係から自衛隊員が中心で、「先生がんばれ！」と応援する子供たちと、「負けたらわかっとうな」と同僚を鼓舞(?)する関係者などで、双方声援にも熱が入ります。辺りは夜9時頃まで盛大な拍手と歓声で賑わっていました。地域の子供や大人はもちろん、地域に間接的に関わる人々まで一体となって盛り上がる、金の隈の一大イベントです。

奉納相撲とは、地域の子供や青年が中心となり、社寺などの近くで相撲を取って神仏に納める行事です。金の隈では毎年9月12日に開催され、大正時代の記録でもこの期日に行われていたことが記されています(「神職奉務日誌」『大谷家文書』福岡市博物館蔵)。また、この行事は「熊野神社奉納相撲」と呼ばれています。熊野神社は、金の隈の宝満宮に祀られる境内社のひとつですが、小さな社に盛大な祭礼が奉納されているのはなぜでしょうか。

江戸時代後期の地誌『筑前国続風土記拾遺』をひもとくと、熊野神社について由来が書かれていました。

村の北熊ノ山といふ所に古塚あり。里人これを発して刀剣の折たる有しを取しか、其後連年村中に痢疫流行して人多く死せり。これを卜者に占せしに古塚を發せし崇のよしいひしかハ、かの刀剣の折を本の如く塚中に埋めて小祠を建て其霊を祭り罪を謝せしかハ、



11 熊野神社奉納相撲の様子。かつては宝満宮境内で行われていたという

12 【上】削平前の熊ノ山(推定)。宝満宮の北にあり、周辺と比べて小高い三角形の丘陵であることが確認できる(昭和50年)【下】削平後の様子。この後、一帯は住宅地となる(昭和56年) 13 「熊野古墳」跡地として記録されている場所(P.9 マップ内④)



其年より疫氣消して病める人なし。これ文化年中のこと也。其祠を熊野社と称して毎年八月十二日村人打集ひ、祀をなして病難を避んことを祈ると云。

文化年間(1804~18)に、村人が「熊ノ山」の塚から折れた刀剣を取り出したため村に疫病が流行り、それを鎮めるべく祠をつくり、毎年8月12日に祭祀をすることになった、という内容です。奉納相撲の期日はこの由来に基づくもので、8月が9月になったのは、新暦に移行したためでしょう。当初から相撲の形をとったのかはわかりませんが、祭事が200年以上の歴史を持つことは間違いなさそうです。金の隈の奉納相撲は、娯楽や交流の場であるだけでなく、神様との約束事を守って、地域の安全を祈る意味が込められているのです。

#### ●熊ノ山ってどこだろう？

さてその熊野神社ですが、宝満宮の石碑には「字隈下に無格社熊野神社」「大正三年七月六日 許可を得て合



## エリアにある主な遺跡

- ▲ 立花寺古墳群
- ▲ 笹ヶ浦古墳群
- ▲ 七曲古墳群
- ▲ 金剛山古墳群
- ▲ 熊野古墳
- ▲ 文殊谷遺跡
- ▲ 立花寺遺跡
- ▲ 金隈遺跡
- ▲ 金隈上屋敷遺跡
- ▲ 影ヶ浦古墳群
- ▲ 影ヶ浦遺跡
- ▲ 持田ヶ浦古墳群 A 群
- ▲ 堤ヶ浦古墳群
- ▲ 持田ヶ浦古墳群 B 群
- 持田ヶ浦古墳群 C 群
- ▲ 持田ヶ浦遺跡・古墳群 D 群
- ▲ 持田ヶ浦古墳群 F 群
- ▲ 今里不動古墳

※すでに失われたものを含む。

凡例

- 150m ~ ■ 50m ~
- 100m ~ ■ 30m ~
- 遺跡 (埋蔵文化財包蔵地)
- 市境
- 水域 ■ 消滅したため池



『福岡県果樹発達史』(福岡県園芸農業協同組合連合会、1979年) ● 『福岡県史 近代資料編 福岡県地理誌(五)』(財団法人西日本文化協会、1993年) ● 福岡市教育委員会・九州考古学会「福岡市今里不動古墳の調査」『九州考古学』第63号(九州考古学会、1989年) ● 福岡市史編集委員会編「新修福岡市史 資料編 考古2 遺跡からみた福岡市の歴史—東部編—」(福岡市、2020年) ● 『福岡市東部農協だより』第11号(福岡市東部農業協同組合、1982年) ● 『福岡市の庚申塔』(福岡市教育委員会、1999年) ● 『福岡市文化財分布地図』東部1(福岡市教育委員会、1981年) ● 『Fukuto』(福岡市東部農業協同組合、1989年7月号) ● 洲上一雄著・三木寿恵雄編「東月隈校区の沿革と歴史変遷」(2007年) ● 「ブドウ園の集団化で経営の安定」『農業世界』8月号(博友社、1963年) ● 『立花寺2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第321集(福岡市教育委員会、1993年) ● 『立花寺4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第466集(福岡市教育委員会、1996年)

【ウェブサイト】JA福岡市東部ウェブサイト (<https://ja-fukutou.or.jp/>)

【所蔵】国土地理院 ▶ P.7 12 ● 市史編さん室 ▶ 表紙・P.5 10・P.6 14・13・P.7 11・P.8 掲載写真 ● 福岡市埋蔵文化財センター ▶ P.3 1・2 ● JA福岡市東部 ▶ P.3 7・8・9

【転載】『立花寺4』福岡市埋蔵文化財報告書第466集(福岡市教育委員会、1996年) ▶ P.3 3 ● 深田豊市『福岡県官民肖像録』(博進社、1913年) ▶ P.3 4 ● 『筑前国産物帳』上巻(元文元(1736)年)、福岡県立図書館デジタルライブラリ ▶ P.3 5

【作成】P.5 6 ▶ 『福岡近郊月隈丘陵の経済地理(二)』第六図を基に作成(地図は1936年発行2.5万分の1地形図「福岡南部」(国土地理院)を基に作成) ● P.8・9 ▶ 地理院地図 Vector(国土地理院)を基に作成

【協力】金隈鷹の水保存会 ● 金の隈町町内会 ● 光安浩一郎 ● JA福岡市東部 ● JA福岡市東部月隈支店

# SPECIAL TOPICS 2

## 金の隈・立花寺マップ

金の隈・立花寺エリアの国道3号線沿いは都市高速やビル・工場群が目立ちますが、東側は実は自然が多く、古い道やたくさんの小さなお堂や神社が残る住宅街。また、市内でも多くの遺跡が点在するエリアとしても知られています。

ぜひこちらのマップをお供に金の隈・立花寺散歩を楽しんでみてください。

### 史跡・神社など

- ① 浦田観音堂
- ② 採石場跡 (吉松砕石株式会社)
- ③ 文殊堂
- ④ 地藏堂
- ⑤ 撰取寺
- ⑥ 日吉神社
- ⑦ 立花寺緑地 (立花寺リフレッシュ農園)
- ⑧ 宝満宮
- ⑨ 金隈観音堂
- ⑩ 地藏堂
- ⑪ 金隈遺跡甕棺展示館
- ⑫ 太陽鉱工採石場跡 (博多金の隈ゴルフヒルズ)
- ⑬ 不動堂
- ⑭ 地藏堂
- ⑮ 梅林井堰記念碑
- 🐒 庚申塔

### 今も残るため池たち

この地域にあるため池のほとんどは江戸時代後期に作られたものです。地域の歴史の証人として、現在は消滅したものも含めて記載しています。

- a 大浦池 (消滅)
- b 笹々良ヶ浦池 (消滅)
- c 大浦池
- d 谷頭池
- e 長尾池
- f 観音ヶ浦池
- g 影ヶ浦池 (消滅)
- h 七畝田池
- i 持田ヶ浦池



【参考文献】内田郁太「日本園芸案内記」(賢文館、1940年) ● 太田敏輝「北九州におけるキャンベル、マスカット・ベリー・Aの栽培」『ブドウ栽培の新技术』(誠文堂新光社、1963年) ● 「大野城市史」下巻(大野城市、2004年) ● 「影ヶ浦古墳群1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第241集(福岡市教育委員会、1991年) ● 「果樹試験場報告」特別報告第1号(農林水産省果樹試験場、1990年) ● 金尾宗平・北崎等「福岡近郊月隈丘陵の経済地理(一)」『地理と経済』第2巻第2号(日本経済地理学会、1936年) ● 金尾宗平・北崎等「福岡近郊月隈丘陵の経済地理(二)」『地理と経済』第2巻第3号(日本経済地理学会、1936年) ● 金尾宗平・北崎等「福岡近郊月隈丘陵の経済地理(三)」『地理と経済』第2巻第4号(日本経済地理学会、1936年) ● 『金隈遺跡第一次調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第7集(福岡市教育委員会、1970年) ● 『金隈遺跡第二次調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第17集(福岡市教育委員会、1971年) ● 「九州沖縄の園芸 第1回九州沖縄各県聯合園芸共進会版」(長崎県、1929年) ● 「九州農業案内」(福岡県立農事試験場、1925年)

● 「果物雑誌」第66号(日本果物会、1911年) ● 佐伯宇一郎「最新梨樹栽培」(成美堂書店、1917年) ● 「史跡金隈遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集(福岡市教育委員会、1985年) ● 「志免町誌」(志免町、1989年) ● 首藤卓茂・小田勝美「祭祀石塔 旧席田郡における祭祀石塔調査報告書」(アーバン・ポレミック社、1993年) ● 「石城志」復刻版(九州公論社、1977年) ● 関浩「実地踏査果樹栽培法」(成美堂書店、1922年) ● 「創立50周年記念誌」(JA福岡市東部、2014年) ● 高倉洋彰「右手の不使い—南海産巻貝製腕輪着装の意義」九州歴史資料館研究論集(九州歴史資料館、1975年) ● 日本園芸会福岡県支会編「福岡県の園芸」(嶺要一郎、1915年) ● 「席田郡村々山ヶ所竝御中札数往還書上帳」『日本林政史資料』15(臨川書店、1971年) ● 「農業視察ハンドブック」(財団法人日本農林漁業振興会、1971年) ● 橋口達也・折尾学「小児骨に伴ったゴホウラ製貝輪」九州考古学』47号(九州考古学会、1973年) ● 「ピュア」340・341号(JA福岡市東部、2010年) ● 深田豊市「福岡県官民肖像録」(博進社、1913年) ● 福岡県園芸試験場「最新園芸特産地ガイド」③中国・四国・九州(誠文堂新光社、1972年) ●

# 新修 福岡市史

## ナナメ読み

今回の  
ナナメ読みは

その8 民俗編三夜

### 近代福岡の夜と昼 「帰りに一杯、どう？」

繰り出すのは居酒屋？ 屋台？ 中華やイタリアン？ 上司や同僚と飲みに行く「飲みニケーション」を避ける人は少なくないでしょうが、社用の「接待」となれば、避けるわけにはいきません。飲酒を強要するのは厳禁だけれど、酒食を共にするのは相互理解を深め、また共感を育み、人間関係を円滑にするともいいます。

その舞台となるのが、夜の繁華街。福岡にも、天神やJR博多駅などの都心部あるいは各地区の駅周辺、商店街、いたるところに飲食店があつて、朝まで営業をしているところも多く見られます。

なによりも忘れてはいけないのが「中洲」。日本三大歓楽街の一つに数える人もいるぐらいで、まさに「不夜城」といえる、博多の夜の象徴ともいふべき街です。

もちろん、歓楽街で遊ぶだけが夜ではありません。家族の団らん、深夜ラジオ、祭り、夜のゴミ出し（福岡ならではの事情）と見回りといった、日常生活の夜もあります。

そんな福岡・博多では、いつから、どんな

「夜の社会」が繰り広げられてきたのか。それを明らかにしてくれたのが、今回紹介する『民俗編三夜』です。しかし、ここではやはり歓楽街での夜遊びをとりあげましょう。

本書では夜遊びの記録も多数紹介されています。たとえば、昭和九（一九三四）年の地元雑誌記事では、県庁の幹部、炭坑業・工業関係者の重役は水茶屋（石堂橋東側付近）で遊んでいたようです。別の記事では水茶屋にある料亭の女将の証言が載っていますが、客として貝島太助、麻生太吉、安川敬一郎、平岡浩太郎、伊藤伝右衛門といった筑豊の炭坑業者の名前が挙がっています。

話は少し変わりますが、令和六年秋に第十九回福岡市史講演会「近代都市福岡の発展と筑豊炭坑家」を開催しました。福岡の都心部に別邸を構えて活動拠点とした麻生太吉、安川敬一郎を軸に、筑豊炭坑家と福岡市の近代化を考える講演会でした。ここでは麻生らが別邸を福岡に構えたのは、県庁と鉱山監督署があつて便利であつたことなど、いくつかの理由があげられました。

講演会后、講師陣を交えた懇親会（当然酒宴です）で、とある参加者が「筑豊炭坑家が福岡に別邸を構えて拠点を置いたのは遊べるからだ」といいました。うーん、なるほど。本書には、炭坑業者で富豪の貝島太市と馬賊芸者の有名なエピソードも紹介されています。

遊びにもいろいろありますが、ここでは冒頭に立ち戻って、「飲みニケーション」と解釈しましょう。同業者、あるいは取引のある工業関係者、はたまた許認可にかかわる役人、こういった人々と酒席を共にして関係を深め、情報を収集し、あるいは下話を作り、事業を展開していったのでしょう。

実は昨年3月に刊行した『資料編 近現代3 モダン都市への変貌』にも、福岡市の政財界で活躍した人たちの「飲みニケーション」に関する資料が掲載されています。そのなかで地元財界人から麻生へあてた手紙に「毎々御馳走になり、ありがたきお礼申し上げます」とあります。彼らの活躍の少なくない部分を、「福岡の夜」が支えていたのは想像に難くありません。



A5 判 上製本（函入り）880頁  
5,000円（税込）

#### 電話申込み・店頭販売

福岡市博物館 ミュージアムショップ（福岡市早良区百道浜 3-1-1）  
☎ 092-823-2800

#### 店頭販売

政府刊行物 福岡市役所内サービスステーション  
（福岡市中央区天神 1-8-1 福岡市役所 地下1階） ☎ 092-722-4861  
ジュンク堂 福岡店（福岡市中央区大名 1-15-1 天神西通りスクエア 2～3階） ☎ 092-738-3322  
丸善 博多店（福岡市博多区博多駅中央街 1-1 JR 博多シティ 8F） ☎ 092-413-5401

#### お問い合わせ先

福岡市博物館 市史編さん室（福岡市早良区百道浜 3-1-1）  
☎ 092-845-5245



レポート

## 第19回 福岡市史講演会を開催しました

2024年10月14日(月・祝)に開催した講演会「近代都市福岡の発展と筑豊炭坑家」は、昨年刊行の『資料編 近現代3 モダン都市への変貌』にちなみ、大正期～昭和初期の福岡市の発展を筑豊炭坑家とのかかわりから考えるというものでした。同書には九州大学附属図書館記録資料館に寄託された膨大な「麻生家文書」からも資料を掲載しているため、今回は同館との共催として、会場も西新の樋井川沿いにある「九州大学西新プラザ」(早良区西新2丁目16-23)での開催となりました。

まずは遠城明雄先生(九州大学大学院教授)による講演「福岡市の都市発展と市政の展開」からスタートです。市制施行～昭和初期にかけての福岡市の都市発展の特徴を「インフラ整備と工業化」「近世と近代」「中央と地方」というキーワードをもとに講演いただきました。続いて日比野利信先生(北九州市立自然史・歴史博物館学芸員)による報告「安川敬一郎と福岡市」では、ご自身が整理にも携わった「安川敬一郎資料」などの一次資料から、安川の人物像や福岡市にどう関わったのかお話をいただきました。次の報告は、記録資料館で「麻生家文書」の整理を担当されている原口大輔先生(同館准教授)から、「麻生太吉と福岡市」と題しお話をいただきました。麻生は福岡市内に購入・整備した浜の町別荘(現中央区舞鶴3丁目付近)を拠点に電力会社合併や製鉄会社誘致など福岡市での事業展開を計画。その一方で、同業組合の運営など政治的手腕にも高い期待が集まっていたのだそうです。最後は有馬学福岡市史編集委員会委員長をコーディネーターとして、ここまでのお三方によるお話を総括してさらに理解を深めるためのシンポジウムを行いました。短い時間ではありましたが、麻生や安川が残した資料について、また近代都市の発展と現代への転換についてなど、話題は多岐にわたりました。

ご来場の皆さんは炭坑の歴史に関心があるというだけでなく、中にはご本人やご親族が炭坑に関わっていたという方もあり、先生方の話に熱心に聞き入っておられました。「筑豊炭坑家」というと北九州との関係をまず思い浮かべがちですが、今回のような福岡市の市政や経済など都市発展に深く関わっていたというお話は、新鮮な驚きだったのではないのでしょうか。ご講演ご報告くださった講師の先生方、講演会にお越しくださった皆さま、本当にありがとうございました。

なお本講演会は福岡市博物館公式YouTubeで公開しており、講演記録は「市史研究ふくおか」第20号(2025年3月発行)に掲載していますので、あわせてご覧ください。



お知らせ

## ブログ【別冊シーサイドももち】が好評連載中です

2022年に刊行した福岡市史のブックレット・シリーズ『シーサイドももち—海水浴と博覧会が開いた福岡市の未来—』(発行:福岡市/販売:梓書院)。この本は埋め立て地にできたニュータウン「シーサイドももち」について、まちができる前史から現代までをマニアックに深掘りした、自治体史としてもなかなか珍しい1冊です。

この本、176ページの本なのですが、企画当初は「シーサイドももちだけで176ページ……?」という空気をじわじわと感じながらも、いざ作ってみるととてもこの分量では収まり切れず……。当初の心配も何のその、調べれば調べるほど次から次へと興味深いネタが湧いて出てくるではないですか! シーサイドももちというまちは博多や天神とはまったく違った歴史をたどっています。その歴史をひもとくことで初めて知る福岡市の姿が見えてきて、さらには福岡市全体の過去から現在、そして未来の姿までもが浮かび上がってきたのです。

とは言えページには限りがあるし、すべてを載せるわけにはいかない……でもこの積み上がったネタたちの山をそのままお蔵入りさせるのはもったいない!

というわけで、2022年8月から書籍『シーサイドももち』の「続き」として、福岡市博物館の公式ブログ上で【別冊シーサイドももち】という連載を始めました。

それから約2年半。コツコツと更新を続けて、2025年1月にはめでたく100回目の投稿を迎えることができました! 100回を超えてもネタは尽きず(本当なんです!), 今後もますますマニアックなシーサイドももちのお話をお届けしますので、ぜひチェックしてみてください。

◆福岡市博物館公式ブログはコチラ▶ <https://fcmuseum.blogspot.com/> ※右のQRコードからもご覧いただけます。





## 「福岡県地理全誌」ってどんなもの？

市史編さん室は市民の皆様から福岡市の歴史に関するお問い合わせをしばしばいただきます。中でも多いのは地名や建物の歴史に関するご相談です。その際、様々な文献を参照しますが、特に利用頻度が高いのは明治時代の始めにまとめられた「福岡県地理全誌」（以下「地理全誌」）です。こちらは当時の町村の情報が、歴史的なものから統計的なものまで総合的にまとめられており、とても便利です。「地理全誌」は明治5（1872）年8月から編集を開始して、同8年12月から同13年7月にかけて国に提出されました。現在は、『福岡県史 近代史料編』として巻首提要と本編の149冊が影印本として5巻にまとめられています。今回は「地理全誌」でどんなことが分かるのか、いくつかの事例をご紹介します。

まず、人口です。人口は町村ごとに戸数と総計が記されます。現在福岡市域になっている町村でこの時点で人口が多かったトップ3は、1位が早良郡<sup>さわら</sup>の<sup>めいのはま</sup>浜村（現 西区）3,841人、2位が糟屋郡<sup>かすや</sup>箱崎村（現 東区）3,167人、3位が那珂郡<sup>なか</sup>春吉村（現 中央区）2,935人です。また、士族、平民、僧侶の戸数についても書かれています。士族の割合が最も高かったのは那珂郡<sup>なか</sup>船津町・洲崎町・極楽寺町（現 中央区天神5丁目付近）で82%です。一方、旧博多部はいずれも士族の比率は0~10%台と低いです。対馬<sup>つしま</sup>小路（現 博多区対馬小路付近）だけは44%で突出していますが、これは江戸時代に対馬藩や秋月藩の蔵屋敷があり、武士が多く暮らしていたからではないかと考えられます。

続いては池です。池は農業用水を確保するために昔から人工的に造成されることがよくありました。現市域の池で造られた年代が分かるものでは、志摩郡<sup>しま</sup>青木村の七身坂池（現 西区今宿青木）が慶長13（1608）年、同郡<sup>なま</sup>女原村の草萩池（現 西区女原）が同17年で古い部類に入ります。草萩池は農学者・宮崎<sup>みやざき</sup>安貞の書齋のほりにある池です。

他にも、この時代に新しく登場したものについての情報も充実しています。たとえば、人力車。この時に報告された現市域の人力車の数は1200台余り。数が多いのは、早良郡<sup>あさと</sup>荒戸村（現 中央区荒戸）の155台、那珂郡<sup>なかくまち</sup>呉服町・西職人町（現 中央区舞鶴2丁目付近）の108台です。「六丁筋」とよばれた旧唐津街道沿いの町で人力車の多さが目立ちます。また、電信線も明治時代の日本に登場したもののひとつです。「地理全誌」には「機柱」と記された電信柱の情報が

町村ごとに載っています。これらをたどっていくと、東は糟屋郡<sup>しもばる</sup>下原村（現 東区下原）から博多へ至り福岡の電信局（現 地下鉄空港線赤坂駅付近）まで来るルートと、途中で分岐して那珂郡<sup>なかの</sup>春吉村から同郡<sup>むぎの</sup>麦野村（現 博多区麦野）へと至るルートが見えてきます。電信線はこの先で長崎に至り、海底ケーブルで海外とつながっていました。

「地理全誌」は他にも興味深いデータがたくさん載っていますが、短期間にこのような膨大な地域のデータベースを作れたのは、最初に編集を担当した臼井<sup>うすい</sup>浅夫（1830~1882）の熱意もさることながら、情報を迅速にまとめて提出したそれぞれの地域住民の努力もあったと考えられます。「地理全誌」には皆さんがお住まいの地域の興味深い情報がまだまだたくさん眠っていると思います。先人がまとめた素晴らしい地域データベースを調べものにぜひご活用ください。



▲「関取りの場所入り」（祝部至善「明治博多風俗図」より）（福岡市博物館所蔵）

### 表紙の写真 立花寺公園からの眺め [博多区立花寺2丁目]

昨年12月、立花寺エリアをウロウロ……いえ調査していると、地元の方が声をかけてくださいました。近くに見晴らしのいい場所があるとのことで、ご案内いただき立花寺公園へ。小高い丘の上にある公園で、昔はここで花見をしたよ、という地域の懐かしいお話をうかがうことができました。表紙の写真はその帰りに撮ったもので、立花寺の集落部や月隈保育園、保育園の西に広がるこんもりした緑地が見え、その上をかすめるように航空機が通過しています。起伏に富んだ地形で緑が多い一方、空港にほど近い立地であることがお伝えできるのではないのでしょうか。今号の特集も地域の方々のご協力なくしてはできませんでした。皆さま、本当にありがとうございました。

福岡市史についての最新情報はこちらから。「市史だよりFukuoka」のバックナンバーも見られます！

福岡市史ホームページ ▶ <https://www.city.fukuoka.lg.jp/shishi/>

福岡市博物館の情報はこちらから。

福岡市博物館ホームページ ▶ <https://museum.city.fukuoka.jp/>

Printed in Japan.

Copyright by Fukuoka City Museum

本誌掲載の写真・図版・記事などの無断複写・転載を禁じます。